

アンデス・アマゾン学会  
研究発表要旨集

*Proceedings of the Annual Conference of SAAS*

Volume 12

2023

アンデス・アマゾン学会  
Society for Andean and Amazonian Studies  
Japan  
[<https://sanams.web.fc2.com>]



# アンデス・アマゾン学会研究発表要旨集

第 12 号

2023

【目次】

アンデス・アマゾン学会第 12 回研究大会プログラム		1
ブラジル邦字新聞『日本新聞』におけるアマゾン移民報道についての一考察：1932 年の記事を中心に	長尾直洋	3
焼け出されたニーニョ・コンパドリート	加藤隆浩	5
パチャママの在り方	岡本年正	7
家畜に合わせて生きる：アンデス牧民と動物との相互作用に関する予備的考察	鳥塚あゆち	9
17 世紀ペルー副王領における経済の多様化とリマ商人勢力の台頭：財政・財務状況の分析を含む	真鍋周三	11
アマゾン下流都市近郊の小農集落に導入されたプロジェクトについて	石丸香苗	13
ヨーロッパのオウム・新世界表象・アンデスの魔物	大平秀一	15
人類学者と探偵：ある殺人事件をめぐる考察	武井秀夫	17
ボリビア・ラレカハの農地改革（2）	木村秀雄	19
奥付		21

# *Proceedings of the Annual Conference of SAAS*

Volume 12

2023

【CONTENTS】

The 12th Annual Conference of SAAS Program		1
A Study on the Reports about Japanese Immigration to the Amazon in the Nippon Shimbun: Focusing on articles from 1932	Naohiro NAGAO	3
Niño Compadrito Burned Out of His Chapel	Takahiro KATO	5
Un análisis de la existencia de la Pachamama	Toshimasa OKAMOTO	7
Vivir con ganado: un estudio preliminar sobre las interacciones entre los pastores altoandinos y los animales	Ayuchi TORITSUKA	9
La diversificación económica y el crecimiento del poder de mercaderes de Lima en el virreinato del Perú del siglo XVII	Shuzo MANABE	11
The projects introduced in communities of small farmers in the Amazon estuary	Kanae ISHIMARU	13
Parrots in Europe, Representation of the New World, Andean evils “Pishtaco”	Shuichi ODAIRA	15
Anthropologist who worked as a detective: Rethinking a murder case	Hideo TAKEI	17
La reforma agraria en Larecaja, Bolivia (2)	Hideo KIMURA	19
Imprint		21

## アンデス・アマゾン学会第 12 回研究大会プログラム The 12th Annual Conference of SAAS Program

期日：2023 年 7 月 1 日（土）、2 日（日）

会場：独立行政法人 国民生活センター相模原研修所（面接と Zoom によるハイフレックス）

1 日目（7 月 1 日[土]）

司会：石丸香苗（福井県立大学）

13:30-13:35 開会挨拶

第 12 回研究大会実行委員長 長尾直洋

13:40-14:10

ブラジル邦字新聞『日本新聞』におけるアマゾン移民報道についての一考察：1932 年の記事を中心に

長尾直洋（名桜大学）

14:15-14:45

燃えたニーニョ・コンパドリート

加藤隆浩（関西外国語大学）

14:50-15:20

パチャママの在り方

岡本年正（慶応義塾大学）

15:20-15:35

休憩

15:35-16:05

家畜に合わせて生きる：アンデス牧民と動物との相互作用に関する予備的考察

鳥塚あゆち（青山学院大学）

16:10-16:40

17 世紀ペルー副王領における経済の多様化とリマ商人勢力の台頭：財政・財務状況の分析を含む

真鍋周三（兵庫県立大学）

16:45-17:30

総会

2 日目 (7 月 2 日[日])

司会：鳥塚あゆち

9:30-10:00

アマゾン下流都市近郊域の小農集落に導入されたプロジェクトについて

石丸香苗 (福井県立大学)

10:05-10:35

ヨーロッパの『オーム喰い』とアンデスの魔物

大平秀一 (東海大学)

10:35-10:50

休憩

10:50-11:20

人類学者と探偵

武井秀夫 (千葉大学)

11:25-11:55

ボリビア・ラレカハの農地改革 (2)

木村秀雄 (自由学園最高学部)

11:55-12:00

閉会挨拶

アンデス・アマゾン学会会長 大平秀一

## ブラジル邦字新聞『日本新聞』におけるアマゾン移民報道についての一考察：1932年の記事を中心に

長尾直洋（名桜大学）

キー・ワード： ブラジル日本移民史、エスニック・メディア、三浦鑿、翁長助成、中西周甫

### A Study on the Reports about Japanese Immigration to the Amazon in the Nippon Shimbun: Focusing on articles from 1932

NAOHIRO NAGAO (Meio University)

Keywords: Japanese Brazilian History, Ethnic Media, Saku Miura, Sukenari Onaga, Shuho Nakanishi

本発表は、ブラジル日本移民史の重要な資料として、第二次世界大戦前に発行された『日本新聞』に注目し、創刊年である1932年を中心に『日本新聞』におけるアマゾン移民関連報道を検討することで、その資料としての特徴を検証するものである。また、同時代の他紙報道との比較を行い、当時のブラジル日本移民言論空間においてアマゾン移民がどのような位置づけにあったのかを確認する。

拙稿 [長尾 2023] では、沖縄県系移民の協力のもと、翁長助成によって創刊され、新聞の論調は翁長に属するという『日本新聞』への従来の理解に対して、創刊初期における翁長の影響は限定的であり、1932年1月の創刊から同年11月まで、非沖縄県系の中西周甫が編集の中心であったことを明らかにしている。本発表では、中西が影響力を持っていた時代の『日本新聞』と翁長が影響力を持った後の『日本新聞』の論調の違いを確認するため、当時進行中であったアマゾンへの日本移民導入に関する記事に注目する。なお、翁長はペルーからアマゾン地域を経てブラジルへと渡った経歴を持ち、『日本新聞』へ関わる以前に『日伯新聞』にてアマゾン移民への反対論を唱えている。以下では、アマゾン移民を巡るブラジル側、日本側の背景を確認した上で、当時の邦字新聞各紙における論調をまとめ、さらに中西時代と翁長時代の『日本新聞』における論調を比較検討していく。

日本からアマゾンへの集団移民の流れは1920年代中頃に始まった。サンパウロ州への移民集中による日本移民排斥の動きを懸念した日本側

と、日本の資本によってアマゾン地域の開発を願うパラ州、アマゾナス両州側との思惑が合致し、1920年代末に日本人の集団移民が開始された [丸山 2014]。本発表で中心的に扱う1932年前後のアマゾン移民の状況について、パラ州への移民は初期に三分の一が退耕してサンパウロ州などへ移動しており、またアマゾナス州への移民については後のジュート栽培成功前の試行段階であった。

アマゾン移民に関するブラジル邦字紙各紙報道について、先行研究では三浦鑿の『日伯新聞』、また香山六郎の『聖州新報』について触れている [清谷 1999; 前山 2002] が、同時代の他紙の論調については論じられていない。各紙の1920年代中頃から1932年までのアマゾン移民関連記事を分析すると、『日伯新聞』は翁長による記事を含めて一貫して否定的、黒石清作の『伯刺西爾時報』は一貫して肯定的、『聖州新報』は当初肯定的ながらもパラ州への移民の窮状を知った後には否定的に転じ、阪井田善吉の『南米新報』は一貫して肯定的であった。

中西時代の『日本新聞』におけるアマゾン移民関連報道を確認すると、アマゾン移民関連動向の報道、帰国後にアマゾン移民を宣伝することになる日本からの短期滞在者への肯定的描写がみられ、また一部批判的ながらもアマゾン移民事業自体への否定的描写はなされなかった。

一方で、1933年1月以降の翁長時代の『日本新聞』では、先に触れた日本からの短期滞在者による帰国後のアマゾン移民宣伝を批判的に転載し、さらに記事内容を直接批判するなど、アマゾン

ン移民へ否定的な報道姿勢が確認できた。

本発表を通して、アマゾン移民を巡る当時の邦字紙各紙の論調、そして中西時代と翁長時代における『日本新聞』の論調の違いの一端が明らかとなった。今後は、別の題材における論調を比較検討することで、中西時代の『日本新聞』の特徴を明らかにしていきたい。

**【主要参考文献】**

清谷益次、1999、「新聞は移民にとっての何であったか（二）」、『人文研』、3:2-63。

長尾直洋、2023、「ブラジル邦字新聞『日本新聞』の創刊と初期運営体制に関する一考察」、『名桜大学環太平洋地域文化研究』、4:15-28。

前山隆、2002、『風狂の記者：ブラジルの新聞人三浦鑿の生涯』、御茶の水書房。

丸山浩明、2014、「アマゾンと日本移民」、『史苑』、74(2):1-26、DOI:

<https://doi.org/10.14992/00009124>。

## 焼け出されたニーニョ・コンパドリート

加藤隆浩 (関西外国語大学・非常勤研究員)

キー・ワード： ニーニョ・コンパドリート、民衆カトリシズム、クスコ、神話化

### Niño Compadrito Burned Out of His Chapel

TAKAHIRO KATO (Kansai Gaidai University, Research fellow)

Keywords: Niño compadrito, popular catholicism, Cusco, mythicization

#### 1. はじめに

ニーニョ・コンパドリート (以下、NC) はペルークスコ市の民衆聖人(カトリック)である。ミイラ化した子供の骨格に、かつら、マントなどを着せ、カトリック聖人の形状に似せて作られている。1950年ごろからその信仰についての証言があり、70年代に信者数が急拡大、それに危機感をおぼえたカトリック教会の弾圧がはじまる。そして信者らの地下活動が開始され、それは、弾圧した大司教らのミステリアスな死まで続いた。「復讐する聖人」という民衆の解釈はその地下活動の中で形成されたが、結局両者は相手に対して無関心を決め込み休戦。その間にNCは「復讐」というイメージをトーンダウンし、信者を再度獲得し安定期を迎えた。そしてNCはクスコの他のシンクレティックな聖人同様、そのまま民衆聖人の地位を確立すると思われた。しかし2021年7月23日礼拝堂から出火。NCは焼け出され、NCはこれまでにない大きな変化を余儀なくされた。

#### 2. 火災についての言説

そこで本報告は1990年から行ってきた定点観察の成果 [Kato 1996:2000] を引き継ぐ形で火災にあったNCがどのように語られ、歴史化・神話化してきているかを検討することにした。なお、[Kato 1996] ではアブラン・バレンシア [Valencia 1983] の史料を再検討しデータを補強、NC信仰の史的展開 (-1994) の輪郭を示し、[Kato 2000] では、夢を媒介に語られてきたNCの「成長の記録」を口頭伝承を使って分析している。したがって以下では以上を踏まえ、1994年以降2022年8月までのNCについての語り

を置く。

すでに述べたように、カトリック教会から異端のレッテルを張られたNCは地下活動を停止すると、民衆の前に「呪詛の聖人」「黒蠟燭の聖人」として登場した。そのイメージは強烈で、1990年8月に初めてNCを見た時も、所有者宅の中庭に設えられた狭い礼拝所で奉獻される蠟燭はすべて黒色だった。しかし1994年はNCへの黒蠟燭の奉納をひかえようという聖像の所有者から信者への要請が示され、他方、親 (pro) NCの神父が、NC像とその信者を教会に入れてミサを行い、その中でNCの神学的位置を説明するという画期的な試みがなされ、期せずして未必の歩み寄りが見られた。それ以来、NCに対する信者のまなざしは、呪詛一本やりの聖人から、各種試験の合格、健康増進、病気平癒、恋愛成就、家内安全など様々な分野での靈験がみとめられることになる。こうして、黒蠟燭が支配的であった礼拝堂に少しずつ白い蠟燭が見られるようになり、2010年代に入ると、礼拝堂が道路側に新築され、そこには、白と黒だけでなく、赤、黄、青、橙、緑、紫、ピンクの蠟燭が現れ、同時に多くの生花で飾られるようになり、かつての「闇」のイメージは完全に消えた。こうしたイメージチェンジのおかげもあってか、NCの知名度は上がり、来訪者数も、信者数も右肩上がり伸びた。こうなると、教会も多くのカトリック信者を獲得している功績を考えれば、教会はそれを見無視することはできず、ましてや、教会がかつてのようにNCに対し追撃、没収、破壊することはないと思われ、NCは安定期に入り、このまま伸び続けるだろうと見られていた。ところで、ここで予想だにしない事件が突発した。2021年7月

23 日夕方のNC礼拝堂の焼失である。

この忌まわしい出来事を機に、所有者の家族は礼拝堂の閉鎖を考えたが、火事から1年ほどして、信者の要請に応える形で、信者の受け入れを再開した。これにより、参拝に訪れる信者とNCの聖像を管理する家族との交流の場ができあがり、火災以前と同様、NCをめぐる情報交換が活発化することになった。口頭で生成される語りが、突如起こった火事に見舞われたNCの歴史、神話化の断片になっていくものである。ただし、予め注意すべきは、そこで語られたことが、直ちにそのままの形で歴史として、あるいは神話として認められるわけではないという点である。

そこで、以下に覚え書きのように記しておくのは、2022年8月の時点で、NCが被った火事についての主な語り（採集時点でまだ断片である）を記しておく。

- 1) NCを30年ほど元所有者（ファン・レトナ氏2020年9月没）が、火災を予言していた。
- 2) 火災は蠟燭の不始末に起因するだろう。
- 3) 予言を無視した家族は出火時に、火傷をし、傷う跡が残っている。
- 4) 新型コロナウイルスのためにNCへの参拝者が増えた。
- 5) 出火の原因は、電気配線のショートではなく蠟燭の火である。
- 6) ミステリアスな弁護士が現れ、一度に大量の蠟燭に点火した。
- 7) 礼拝堂は焼失したがNCは無傷のまま残った。
- 8) 火災の燃えカスを集め、呪物にしようとする信者が多数いた。その光景はタキオンコイや偶像崇拜撲滅運動への先住民側の反応を想起させる。
- 9) 奇跡的な消火活動

### 3. おわりに

この報告にはNCの近況をカルトの動態とそれを生み出す主要要素を取り上げ分析をする際に、役立ちそうな言葉、フレーズをメモしたものである。したがって、この発表にはもとより結論はないが、次の2点だけ述べておきたい。

1. かつてNCの歴史、意志、願望等は夢を媒介に告知されることが多かったが、近年カラー蠟燭の出現とその導入によって大きな転機を迎えている。
2. 火事という出来事を超自然的な現象と捉えようとする言動が見え始めている。

#### 【主要参考文献】

- Kato, Takahiro, 1996, Breve historia del Niño Compadrito del Cuzco. In *Tradicón Andina en Tiempos Modernos, Senri Ethnological Reports 5*, ed. H. Tomoeda y L. Millones, pp.31-47, National Museum of Ethnology, Osaka.
- Kato, Takahiro, 2000, Historia tejida por los sueños: formación de la imagen del Niño Compadrito, *Desde afuera y desde adentro, Senri Ethnological Reports 18*, ed. L. Millones, H. Tomoeda, y T. Fujii, pp.159-190, National Museum of Ethnology, Osaka.
- Valencia, Abraham, 1983, *Religiosidad popular: el Niño Compadrito*, Instituto Nacional de Cultura Cusco.

## パチャママの在り方

岡本年正 (慶應義塾大学)

キー・ワード： パチャママ、互酬制、畏敬、個別性、普遍性

### Un análisis de la existencia de la *Pachamama*

TOSHIMASA OKAMOTO (Keio University)

Keywords: *Pachamama, Reciprocidad, Reverencia, Particularidad, Universalidad*

近年、アンデスの地域的信仰の対象であるパチャママ (*Pachamama*) が、より広範な文脈で言及されてきている。例えば、日本 (語) においても、パチャママに言及するウェブサイトやコラムなどが散見され、ラテンアメリカにおいては、憲法や法律においても、パチャママは言及されてきている。このように、地理的な広がりや、民間信仰の枠組みを超えた広がりの中で注目されているパチャママであるが、もちろん、アンデスの地域的な信仰において変わらず重要な存在であり続けている。本報告においては、近年のパチャママについての言及をまとめ、報告者のフィールドでの「経験」と関連させつつ、歴史的視点、民族学的視点、社会・政治的視点からパチャママの現状を分析し、現代世界におけるパチャママの在り方を考察することを目的とする。

パチャママとは何か。概して、女性性を持つ大地の神格であり、アンデス世界で最も重要な神格のひとつである。母なる大地 (*La Madre Tierra*) や聖なる大地 (*La Santa Tierra*) といった表現が同義、もしくはそれらの表現がパチャママとともに用いられたりする。基本的には、エクアドル、ペルー、ボリビア、チリ、コロンビア、アルゼンチン北部といった汎アンデス的に広がる信仰であり、インカ帝国の版図との重なりを指摘することができる。またパチャママの語義に関して分析している先行研究においてまとめられているのは、パチャママが大地のみを表すだけでなく、時間や秩序といった意味を含み、生命を支えるために必要な自然的、物質的、象徴的な力の全てを携えているとする [Vitry 2003:232]。

一方、アンデスの人々には、絶対的な超越的存在というより、腹を空かせる不完全な存在とし

て認識されている。特に乾期の終わりである8月、大地への支払いと訳せるパゴ・ア・ラ・ティエラ (*Pago a la tierra*) の儀礼において、供物が食事としてパチャママに捧げられる。これを通し、人々は大地、すなわちパチャママに感謝を示しつつ、次の収穫や家畜の増殖などを確実なものとする祈りを捧げる。このパゴ儀礼を巡っては、アンデスの信仰における呪術師であるクランデーロまたはパコ (*Paco*) が、儀礼を行う際に手間賃を受け取ったり、呪物店が供物のパッケージであるデスパチョを販売したり、観光業者がパゴ儀礼を組み込んだツアーを販売するなど、経済活動が行われている。

一方、例えば絵本において、パチャママは守るべき環境全体として描かれ、その環境を守るために祖先の教えを尊重することが説かれる [Pukllasunchis 2008]。他方、エクアドル憲法やボリビアの法律では、環境保護につながる考えであるが、パチャママもしくは母なる大地を主体として扱い、その権利を認めている。

このような現状にあるパチャママであるが、歴史的には、インカ時代以前からの伝統であり、インカによって国家的崇拜対象となった。そしてスペインによる征服後は、聖母マリアとその女性性とシンクロする一方で、マリア像自体は山を表象する形態をとった [Gentile Lafaille 2012]。そもそもアンデスの信仰において、山の神格 (アプ、アチャチラ等) は男性的特徴を示しているが、マリア (のイメージ) を介してパチャママがジェンダーを超えて山までも含むに至っている。

民族学的状況においては、パゴ儀礼において、大地としてのパチャママに供物を捧げてはいる

が、個別にアプを招待(アプの名を唱える)する。それと同時に、都市部で行われる場合に顕著であるが、自らの住む場所や働く場所、ゆかりのある場所の土地の名前や住所そのものを唱え、大地はより個別的な存在として扱われる側面がある。また、大地と人々の互酬の意味だけが普遍的に捉えられ、人々は大地から直接収穫物を得るのではなく、パチャママを介して様々な成功を確実なものとしようとする。パゴ儀礼に関わる観光では、パチャママは普遍的な大地全体の存在として示され、観光客にパチャママを崇拝する余地が与えられ、教育においては絵本の中で自然環境全体へと昇華させられ、環境保護という普遍的な価値へと結び付けられている。絵本では同時に、祖先の教えや伝統・慣習への敬意・継承といったアンデスの文脈における個別性も重要視されている。

そして昨今具体的に描かれるパチャママが、かつての老婆のイメージから、若い女性となっている。これは豊穡、そこからの成功との結びつきの一方で、老婆、つまり年配者への畏敬、特に「畏れ」が抜け落ちているためと考えられる。近年のパゴ儀礼に見られる姿勢には、与えれば生み出すという循環のみが考えられており、なぜパチャママが「食べ物」を欲しがするのか、それを行わない場合は何が起こるかといった「畏れ」については考えられていない。そして都市部では、各人の経済状況や必要性によって恣意的にパゴ儀礼が行われ、パチャママは都合よく利用される対象となっている。

社会・政治的側面として、法律上パチャママの権利を認めることは、大地から自然全体への敬意を共有して自然保護へと向かいつつ、そこに付随する先住民文化を尊重し保護することといえる。特にパチャママを主体として扱うことで、多様な世界を受容していることを示している。とはいえ国家が先住民の世界観を取り込むことは、先住民にとって権利回復・確保・維持につながると同時に、先住民の思想までもが政府の管理下におかれる。政府にとっても先住民にとっても、パチャママが政治的利用の対象となっている。

このように、個別的かつ普遍的であるという二面性のおかげで、パチャママは個別具体的な意味を維持しつつも広範に受け入れられており、その結果、パチャママへの信仰が活性化している。一方で、普遍的に受容される中で、人々に与えるだけでなく供物が無ければ奪うというパチャママ本来の二面性のうち、奪うという畏れの側面が抜け落ちてしまっている。個別性がなく畏れられないパチャママは、アンデスの信仰における本来の意味でのパチャママ像と異なる。ここにおいて、アンデスの信仰は現代世界において利用できる側面のみが受容され、アンデスの人々にとっての本来の意味が薄れてしまっていることが指摘できる。都合の良い普遍性のみを受容することは、現代世界がアンデスの民間信仰、そして文化を吸収・統合する方向へ進み、現代世界が目指す文化的固有性を認め多様性を維持し続けることから逆方向へ進むこととなる。以上より、世界の多様性を考えるうえで、パチャママは重要な考察対象の一つとなる。いかにパチャママが受容/利用されていくかを引き続き注視していくことは重要である。

#### 【主要参考文献】

- Gentile Lafaille, Margarita E., 2012, Pachamama y la coronación de la Virgen-Cerro. *Iconología, siglos XVI a XX. Simposium (XXª Edición):1141-1164.*
- Pukllasunchis, 2008, *Apu*. Asociación Pukllasunchis, Cusco.
- Vitry, Christian, 2003, Fiesta nacional de la Pachamama: El ritual de alimentar a la tierra. In *Gastronomía y turismo: Cultura al plato*, edited by Lacanau, Gloria C., and Juana A. Norrild, pp.227-244, Centro de Investigaciones y Estudios Turísticos, Buenos Aires.

## 家畜に合わせて生きる：アンデス牧民と動物との相互作用に関する予備的考察

鳥塚あゆち（青山学院大学）

キー・ワード： アンデス牧畜、人間と家畜との関わり、家畜間の相互作用、複数種

### Vivir con ganado: un estudio preliminar sobre las interacciones entre los pastores altoandinos y los animales

AYUCHI TORITSUKA (Aoyama Gakuin University)

*Keywords: el pastoreo en los Andes, relaciones entre humanos y ganados, interacciones entre ganados, multiespecies*

ペルーのアンデス高地では、人々は在来種のラクダ科動物であるリヤマとアルパカのほか、ヒツジ・ウシ・ウマなどの旧大陸由来の家畜も含め、複数種の家畜を飼養してその生業を成り立たせている。牧畜家畜以外にも護畜用のイヌや、稀にネコやニワトリも飼い、近年では現金収入源としてマスを飼い始めた者もいる。当然のことながら、種による性格や行動の差異が存在することから、放牧だけ考慮してみても複数種を扱うことは負担になる。にもかかわらず、人々は多様な動物とともに暮らすことを選択している。

稲村はアンデス牧畜形態の特徴として、定住性、乳利用の不在、農耕との強い結びつきの3点を挙げている [Inamura 2006]。ラクダ科動物の牧畜は標高 4000m 以上の高地で行われ、放牧地と住居を往復する日帰り放牧の形態をとる。本報告では、これらの特徴に加え、人間と動物および動物間の相互作用に着目し、そこから描出できるアンデス牧畜の特徴について検討した。

人間と他種との相互関係に関する議論は、生態人類学分野で研究の蓄積がある。当該分野では、人間と動物の相互関係に焦点が当てられ、人間による生態系利用の解明が主たる目的とされた [近藤・吉田 2021:32]。これに対し、2010年頃から議論が盛んになっているマルチスピーシーズ民族誌／人類学では、3者以上が絡まり合い、ともに生きる関係が考察される。近藤 [2022] はその特徴を、多種と「ともに生きる」というローガンを持ち、バラエティ豊かな存在が検討の対象となり、人新生への強い関心から傷ついた地球に生きる術の模索を行うと述べている。さ

らに研究成果の公表においては、映像やアートなど文字によらない表現を積極的に採用することも特筆すべき点とされる。

生態人類学においても、人間と動物、異種の動物同士など非対称なもの同士の相互行為に注目して研究が進められてきたが [木村 2015]、近藤らが指摘するように、無機物や菌類などはその射程になかったと言えるだろう。動物と人間の二者間関係ではなく、複数種が寄り集まってひとつの場に生きるという捉え方は今後の議論展開において有用であり、また人新世における他との共生という点ではデンス牧民の生き方から学ぶべきところがあるように思われる。

これらの議論を踏まえ、報告者が直接的に動物と関わった経験から3つの事例提示を行った。なお、事例2および3の詳細は鳥塚 [2022] で報告している。

事例1は、2017年8月の放牧中に、湿地 (*bofedal*) に沈んで溺れたアルパカを牧民 A と救出した事例である。死にかけているように見えたアルパカを A は見捨てず、体の向きを変えて日に当てるなどしてその体を温めた。夕方に家に群れを帰す際には、ともに帰ることを期待してアルパカの群れを近くに誘導した。アルパカからはこの個体のおいを嗅いだり立ち止まったりしたが、リヤマやヒツジは近づこうとしなかった点が特筆される。

事例2では、2016年3月に観察したリヤマ2頭（黒茶色、白色に茶の斑）の出産について報告した。黒茶のリヤマの出産は通常通り進んだが、白色の出産は難航し、30分経っても終わらな

ったため、牧民 B が外に出ていた仔の首と脚を途中まで引き抜いた。通常は出産時には母畜は神経質になり、人間や他個体が近づくとを嫌がるが、この場合は介助を受け入れたように思えた。また、出産が近くなるとリヤマは 2 頭に近づいてきたが、アルパカとヒツジは無関心だった。B は出産後に、正しい母子認識を促すため、同じ場所で出産した 2 頭を引き離した。

事例 3 では、2017 年 8 月に観察した人間による仔ヒツジへの人工哺乳について報告した。人工哺乳はそれほど珍しい事例ではなく、家畜の種別を問わず行われる。母畜は初産・栄養不足等の理由から育児を放棄することがあり、その仔は「チェタ (*cheta*)」と呼ばれる。当該事例では、母畜との死別がその理由だった。哺乳のために群れの中からチェタを呼ぶと、自分が呼ばれたことを理解して走ってくる。他方、他の個体は耳だけ動かしたり顔を向けたりはするが、「自分のことではない」とわかっており、人間の呼びかけに応答しなかった。

以上の事例から、アンデスにおける人間と家畜、家畜間の相互作用の特徴を、次の 3 点から考察した。

#### 1) 人間と家畜の相互作用

牧民は、出産介助においても哺乳においても、基本的には家畜の主体性を重視し、完全に介入しないという選択をしている。出産では母子の関係を分断しないため、リヤマ自らが仔を産むことが求められ、また「家畜が嫌がる」という理由から強制的な乳母付けも行われない。さらに別の日には、チェタだったヒツジが成獣になっても人間の家に近づくと、「よくないこと」とみなして群れへと追いやっていた。家畜は人間が馴致した動物ではあるものの、過度に人間に慣れて群れ社会から除外されないように配慮しているように思える。

#### 2) 家畜の帰巢本能と群居性

ラクダ科動物には帰巢本能があると言われるが、まさに溺れたアルパカの事例はそれを明瞭に示していた。夕方に群れとともに家に帰ることができなかった個体は、夜間に、徒歩で 20 分ほどかかる場所から戻り、囲いの石積み飛び

越えて群れに合流していた。通常、群居性の動物が 1 頭で行動することはないため、牧民もこのことに驚いていた。家畜は普段から鳴いてコミュニケーションをとることで個体同士を認識し合い、帰属する群れを理解していると考えられる。

#### 3) 種による親和性と区別

溺れたアルパカと出産の事例からは、同種間の親和性、別種間の区別が明確に見てとれた。放牧への出発時や帰宅後に囲いに入る際、また囲いの中でも、家畜は種ごとにまとまる習性をもっていることもよく観察される。

以上から、人間が家畜を完全に馴致しない関係性の中での、人間と家畜の相互協力、家畜の主体性重視、呼応と非応答という特徴が確認できる。また、同種間の親和性をうまく利用して複数種の放牧を成立させていると考えられる。

#### 【主要参考文献】

- Inamura, Tetsuya, 2006, *Las características del uso de camélidos en los Andes: el pastoreo y la resurrección del «Chacu»*, la tradición incaica en el Perú. En *Desde el exterior: el Perú y sus estudiosos, tercer congreso internacional de peruanistas*, Nagoya, 2005, Luis Millones y Takahiro Kato (eds.), pp.35-70, Fondo Editorial de la Facultad de Ciencias Sociales, UNMSM, Lima.
- 木村大治、2015、「はじめに：行為のもつれ」、『動物と出会う I: 出会うの相互行為』、木村大治編、pp.i-xiii、ナカニシヤ出版。
- 近藤祉秋、2022、「マルチスピーシーズとは何か?」、『思想』(マルチスピーシーズ人類学)、2022 年第 10 号 (第 1182 号) :7-26。
- 近藤祉秋・吉田真理子、2021、「人間以上の世界から「食」を考える」、『食う、食われる、食いあう：マルチスピーシーズ民族誌の思考』、近藤祉秋・吉田真理子編、pp.9-65、青土社。
- 鳥塚あゆち、2022、「人間・家畜・自然の関わり合いから生成される文化：アンデス高地で家畜とともに生きる人々から学ぶ」、『「縁側」知の生成にむけて：多文化関係学という場の潜在力』、多文化関係学会編、pp.189-206、明石書店。

## 17世紀ペルー副王領における経済の多様化とリマ商人勢力の台頭：財政・財務状況の分析を含む

真鍋周三(兵庫県立大学)

キー・ワード： 太平洋沿岸部の交易、リマ商人、ペルー植民地の財政・財務状況、リマ財務府の収入と支出、財務官僚の官職販売

### La diversificación económica y el crecimiento del poder de mercaderes de Lima en el virreinato del Perú del siglo XVII

SHUZO MANABE (University of Hyogo)

Keywords: *comercio en la costa del Océano Pacífico de Sudamérica, mercaderes de Lima, circunstancias financieras en la colonia del Perú, ingresos y gastos en la Caja Real de Lima, venta de servicios del gobierno de cajas reales*

#### 1. はじめに

本報告は、アンドリーエンが行った緻密な調査研究を基に、ペルー植民地の社会的成層関係において最上層部の検討・考察を行う。17世紀南米太平洋沿岸部の政治・経済の中心都市としてのリマを舞台に、海岸部諸地域の生産や商業の実態、海外との交易にも焦点をあて、ペルー副王領における経済の多様化とリマ商人勢力の台頭を考察する。そして引き続いて副王領の財政・財務状況を明らかにする。

上記の作業を経て、水銀をメキシコならびにポトシに運んでいた主体、海外からポトシにもたらされた物資のうち、太平洋沿岸部経由で輸入された舶来品(大半が奢侈品)をポトシ市場に届けた主体、そしてその対価としてポトシ銀を太平洋岸・中米地峡経由でスペインなりメキシコ(アカプルコ)方面に送り出した主体、太平洋沿岸部地域産の品々、例えばキト産のラシャや砂糖などをポトシに運んだ主体が、リマ商人であったことを明らかにしたい。

#### 2. ペルー副王領における経済の多様化と太平洋沿岸部

ペルー副王領における各都市の成長と市場経済下での植民地人の積極的な活動は、地方の生産、消費需要の高まりを生んだ。大西洋交易の後退に起因する舶来品不足や一部の商品の物価高騰は、地方における投資を事業家に煽った。太平

洋沿岸部における生産や商業が繁栄することになる。密貿易従事者は跡を絶たなかった。スペインはペルー植民地(副王領)に対して新税課税、税率のいっそうの増加を期待・要求した。しかしペルー植民地のエリートは重税に反対した。本章では、太平洋沿岸部の交易をめぐる留意点として、フィリピンとヌエバ・エスパーニャ(メキシコ)間の、またリマを中心とする太平洋沿岸部の交易状況を検討した。

#### 3. リマを中心とする沿岸部地域の交易とリマ商人

最初に「リマ管区」の地理的位置を確認し、続いて、「ペルー副王領の首都リマ」が副王領統治の政治上の中心であること、リマの人口や人口構成について述べ、リマの外港カヤオに言及した。イギリス、オランダの海賊船の出没に際し、歴代のペルー副王がカヤオの要塞化・守備に尽力してきた。1579年から艦艇を編成・配置し、1640年には町に城壁を築いて敵の攻撃に立ち向かった。「経済中枢としてのリマ」では、リマが南米植民地の商業・経済の中心拠点であり一大消費市場でもあった点を述べた。リマの弱点として地震など自然災害の影響を指摘した。「リマ商人の動向」では、1613年におけるリマ商人ギルド(コンスラード)の設立、実態を述べた。リマ商人が力を得るうえでよく利用したのが有力家系との縁組みであったこと、「ペルレロ」と呼

ばれたリマ商人の行動様式・活動範囲を確認した。17世紀太平洋沿岸部における主な交易品の流れをまとめて提示した。

#### 4. ペルー植民地の財政・財務状況とリマ商人

「収支決算書、税種、徴税」では、リマ財務府の収入の内訳として①地元のリマ管区で集められた税収入と、②ペルー副王領内にある16か所の地方財務府からの(余剰)税収入の額を示した。リマ財務府はこの収入を副王領行政のさまざまな部署の経費にあて、残りをスペインに送った。財務府官僚の仕事について述べた後、リマ財務府で記録された税をいくつかのカテゴリーに分けて説明した。新税の例として①のうちユニオン・デ・アルマス(防衛税)に言及したほか、リマのカビルドやコンスラードが税徴収を請け負うといった方式が常態化した点を確認した。税種:アルカバラ(販売税)、アルモハリファスゴ(関税)、防衛税、アベリア(護衛船料)や新税:防衛税、メディア・アナタ(官僚と聖職者に課せられた「年収の半分」に相当する所得税)、文書税等を検討した。

②に関して地方別に大きい順から示すと、第1位がポトシ、第2位がオルロ、第3位がクスコ、第4位がカイリョマ、第5位がチュクイートであったこと、銀産地を抱える地域からの送金額が大きかった点を確認した。

「財務官僚の官職販売の影響」では、1633年に財務官僚の官職販売が始まって以降、リマ財務官僚にリマ商人が就任するケースが増えた状況を、事例を示して検討した。また財務官僚が「負債」を蓄積するなどの問題点を指摘した。

「リマ財務府の支出」では、太平洋沿岸における英蘭の海賊の襲撃にふれ、ペルー副王領の防衛費の増大を背景にスペインへの送金額が削減されていった状況を指摘した。

#### 5. おわりに

海運業に従事したリマ商人はヨーロッパやアジアなどからの舶来品、銀や水銀をはじめとして、太平洋沿岸部産のキト産のラシヤ、小麦、ぶどう酒、砂糖などの販売を通じて富を蓄え、リマ

においてカビルドはもとより副王庁、財務府、会計審査会などの要職を占め、コンスラードを結成して商人間の結束を固めた。ペルー副王領の政治・経済・社会に影響を与えたほか、海外でも知られる存在となった。ポトシの銀ビジネスやワンカベリカの水銀ビジネスを支え、主体となって牛耳ったのはリマ商人であった。経済基盤を確固たるものにし、ペルー副王領の経済界を牽引するに至った。南米太平洋沿岸部一帯はもとより海外とくに東アジア、中米地峡、ヌエバ・エスパーニャ(メキシコ)、スペイン本国にもリマ商人の影響は及んだ。リマ商人は1633年から始まった財務官僚の売官制を通じて、リマ財務官僚の役職を掌中に収めていく。副王をはじめアウディエンシア閣僚といった植民地指導者との紐帯を築き政界にも進出する。

地方財務府を束ねるリマ中央財務府の税収入とその支出を検討すると、ペルー植民地の財務状況が明らかになった。ペルー植民地からスペインへの送金額は、17世紀末の1681-90年には支出額全体の僅か5%にまで落ちた。これとは反対に同時期において支出額全体の43%が防衛費に割かれていた。本国スペインは、ペルー植民地からの「送金額」の増額を要請したけれども、実現には至らなかった。ペルー植民地の防衛費を削減するならば、ペルーからの富の多くを他国に奪われることになり、その意味で防衛費の削減はスペイン国家財政の根幹を揺るがしかねない事態を招く怖れがあった。王権にとって太平洋沿岸交易の破綻だけは避けなければならなかったはずである。

#### 【主要参考文献】

- Andrien, Kenneth J., 1985, *Crisis and Decline: The Viceroyalty of Peru in the Seventeenth Century*, University of New Mexico Press, Albuquerque.
- Jiménez, Ismael Jiménez, 2016, *Economía y urgencia fiscal: los asientos hacendísticos del Consulado de Lima en la segunda mitad del siglo XVII. Histórica*, XL. 1, pp.35-63.

## アマゾン下流都市近郊の小農集落に導入されたプロジェクトについて

石丸香苗 (福井県立大学)

キー・ワード： 家族農業、土地改革、食糧安全保障、ESG

### The projects introduced in communities of small farmers in the Amazon estuary

KANAE ISHIMARU (Fukui Prefectural University)

Keywords: distribution channels, solidarity economy, land reform. Administrative support

#### 1. はじめに

ブラジルは国土の約 3 割 237 万km<sup>2</sup>が農地として利用され [The World Bank 2020]、数にして 9.1%にしか満たない 1000ha 以上の巨大農家が耕作可能地の約半分を占有する一方、数にして 47.9%を占める 10ha 以下の小農の土地は 2.3%を占めるに過ぎず、さらに近年は外国人による農地取得が進んでいる [佐野 2013:54]。大規模農家による生産の多くが輸出用のコモディティとして外貨を稼ぐ一方、国内の食糧安全保障は低く全世帯の約 28%が食糧不足にあり、国民の 4.1%が栄養失調にある [PENSSAN 2022]。小規模農家による生産の大部分が地域限定的な流通を通してローカルで消費されており、国内の食糧安全保障に果たす役割が大きい。

小農の多くの世帯が、安定的な販売先の開拓や技術指導、設備投資に必要な金銭的支援を必要としており、これらの支援はブラジル国内の食糧安全保障に繋がる。農村部の小農たちに対してどのような主体がどのような支援活動を行っているのかを調べるため、アマゾン河口部のパラ州にある小農集落において活用されている農業や生活支援に関するプロジェクトを調べた。

#### 2. 行政組織によるプロジェクト

家族農業支援プログラム (Pronaf: Programa de Fortalecimento da Agricultura Familiar) は 1996 年に連邦政府によって創設された。融資や技術支援など様々なタイプの支援を含む一連の家族農業支援策であり、アグロエコロジーや女性・若者の生産者を奨励している。支援の一環として委託を受けた民間金融機関によるマイクロクレジットが行われており (図 1)、活発な生産物販売

を行う世帯では融資を受けて葉もの野菜の苗床や灌水設備などを充実させていた。

2003 年に創設された食糧獲得プログラム (Plano Aquisição de Alimentos: PAA) は、家族農業の生産物を自治体が購入し、低所得世帯に基本食糧 (cesta basica) として配布するもので、家族農業支援と食糧安全保障の両方に寄与する。同じく連邦政府による国家学校給食プログラム (Plano Nacional Alimentação Escolar: PNAE) は、地域の学校給食に使用する食材の 30%以上を同じ自治体の小農から購入することを定めており、販売収入を得る世帯にとって販路確保に有効である。一方、定期的に一定量の生産物を収める義務が生じるため、参加できる世帯が限定的になるというデメリットも生じていた。

各州に整備され技術支援や就業支援等を行っている農業普及公社 EMATER からは、技師が定期的に支援を必要とする世帯を訪問し、有機肥料の作り方や養鶏と組み合わせた農業システムを指導している。技術以外では女性グループの起業コースや収支帳簿のつけ方の指導など、広範囲にわたる支援が行われている。



図 1 融資した世帯を訪れる Banco do Brasil の職員 (左)。

### 3. 民間組織等によるプロジェクト

フランス人青年二名によって設立されたシューズブランド *Veja* は、環境と人権に配慮したサプライチェーンと透明性を確保した製品のビジネスモデルを作りあげ、アマゾンのセリンゲイロ（ゴム採取者）や北東部の綿花栽培農家など、ブラジルの持続的な生産者から原材料を確保している。調査集落にも *Veja* のプロジェクトが参入し、綿花栽培を契約した世帯にアグロエコロジーについての教本が配布されていた（図2）。

環境 NGO も生産者への苗木の提供や技術支援を行っていた。また、集落の一部をアグロフォレストリーのパイロット試験地としていたが、その土地を分割して居住権を販売するなど失敗に終わった部分も観察された。

農業以外では、大学医学部の社会連携として学生による定期的な診療や、ペンテコステ派プロテスタントの教会組織による子供たちへの夏休み教室などが行われていた。

### 4. まとめ

連邦政府による PAA はルラ政権の復帰により 2023 年 7 月から再開されたもので、販路が少ないへき地域の小農の利便性を向上させていた。第一次ルラ政権（2003-2007）では、食糧安全保障や農村開発推進のために家族農業を重要視していた [佐野 2013:54] が、支持母体がアグリビジネスを行う農牧族であり、一貫して開発重視の姿勢を取ったボルソナロ政権（2018-2022）によって、PAA は Programa Alimenta Brasil に代替されていた。ルラ大統領は近年の欧州を中心とした ESG の潮流を追い風に、国際社会で環境大国としてのプレゼンスを確立しようとしていると考えられ、今後も連邦政府は小農支援に関連するプロジェクトに力を入れていくと予想される。

一方、州が管轄する組織は連邦政府から独立性が高く、政権交代による影響を受けにくい。EMATER でも政権交代の影響に左右されず、恒常的なサポートが行われており、多くの生産者たちが、最も信頼できる支援であると意見をしていた。

民間組織等による支援は、広告効果、学生の実

習の場の確保、宗教的啓蒙と信者拡大など、支援を提供する組織それぞれのメリットが前提であった。*Veja* の各契約世帯の綿花栽培面積は 1ha にも及ばず、輸送費や手間を考慮すれば原材料確保としての役割は小さい。契約農家自身も「キャンペーンとしての役割」と分析していた。

小農たちは行政・民間等のプロジェクトを取り入れたものの短期で終わるものも多く、様々な主体から提供されるプロジェクトに対してトライ・アンド・エラーを繰り返しつつ、自分の状況に応じ選択をしていた。州の支援体制に最も信頼を置いていたことから、密接で長期的に安定した支援体制が求められていると考えられる。

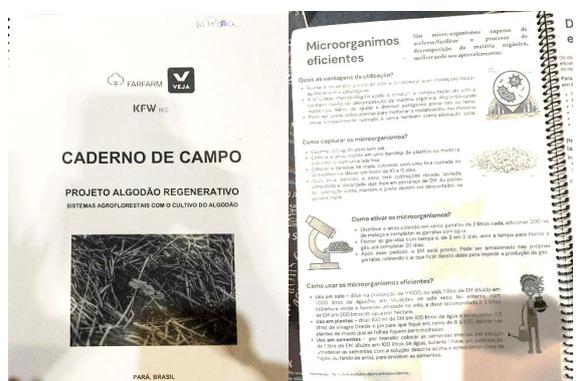


図 2 *Veja* が契約農家に配布する教本。環境に良いアグロエコロジーについて説明が並ぶ。

### 【主要参考文献】

佐野聖香、2013、「ブラジルの土地所有構造と地制度：家族農業支援と外国による農地買占めの現状」、『アジア経済研究所 ラテンアメリカの土地制度アグリビジネス調査研究報告書』、54-79。

Rede PENSSAN (Rede Brasileira de Pesquisa em Soberania e Segurança alimentar e Nutricional), 2022, *II Inquérito Nacional sobre Insegurança Alimentar no Contexto da Pandemia da COVID-19 no Brasil* [livro eletrônico]: II VIGISAN : relatório final/Rede Brasileira de Pesquisa em Soberania e Segurança Alimentar – PENSSAN. -- São Paulo, SP : Fundação Friedrich Ebert.

The World Bank., Agricultural land (% of land area)-Brazil, Data Bank Micro Data Catalog, URL: <https://data.worldbank.org/indicator/AG.LND.AGRI.ZS?locations=BR> (最終アクセス：2023/9/14)

## ヨーロッパのオウム・新世界表象・アンデスの魔物

大平秀一（東海大学）

キー・ワード： 話す鳥、オウム喰い、食人、ピシュタコ（脂取り魔）、ナカク

## Parrots in Europe, Representation of the New World, Andean evils “Pishtaco”

SHUICHI ODAIRA (Tokai University)

Keywords: Talking bird, Papagayo, Psittacophagy, Anthropophagy, Pishtaco, Nakaq

クリストバル・コロンやアメリゴ・ヴェスプッチらの探検・航海により、あるはずのない場所（南半球）から未知の大陸が出現し、アジア・アフリカ・ヨーロッパという3つの部分からなるヨーロッパの伝統的な世界概念は崩れ去った。よって、世界の第四部分・新世界・アメリカと呼ばれた地域は、新奇・異質・異様・驚異といった観念と共に登場したことになる。先住民には、強い他者性が付与されて歪んだ眼差しが向けられ、裸体・羽毛装飾・食人・異様に豊かな富などが、新世界表象を代表する要素・記号と化していった。本報告では、これらの中からオウム・羽毛を取り上げ、内奥に潜むヨーロッパにおけるその意味を確認して新世界表象の背景を捉え直した。また、オウムがアンデスの脂取り魔の呼称と化していることを指摘した。

コロンは、第1回航海において、アジアに到った証拠として、最も鮮やかで魅惑的な色のオウム40羽を持ち帰っている。1500年、喜望峯経由でインドに向かおうとしたカブラルは、西に流されてブラジルに漂着し、そこを「パパガ（オウム）の土地」と呼んでいる。1502年のCantinoの地図には、ブラジルにすでに3匹のオウムが描かれている。以後、新世界表象には、必ずといってよいほど、オウム・（多彩な）羽毛装飾が伴うようになり、同地域の記号と化していく。豊かな森の広がる新世界に多く生息していたため、その鳥が同地域のシンボル・記号と化するという単純な論理ではない。というのは、ヨーロッパでは、ギリシャ時代にはすでにオウムが飼われており、多様な意味が付与されていたためである。

ヨーロッパの著作におけるオウムの記述は、クテシアスの『インド誌』（～B.C.398）、アリス

トテレスの『動物誌』（B.C.344-342）等にすでに認められ、いずれも話すことに着目されている。B.C.327年、アレクサンダー大王の東方遠征以後、ヨーロッパに多くのオウムがもたらされ、ペットとして飼われるようになった。ローマ時代～中世には、プリニウスの『博物誌』（A.D.77）をはじめ、地誌・歴史書・料理書・図鑑・文学作品等、多様なジャンルでオウムの記述が残されている。また、ローマ時代のモザイク画・壁画のほか、聖書の装飾・絵画・宗教画、そして織物などにも、オウムの図・モチーフが多く示されている [Boehrer 2004a]。

神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世は、親交の深かったアイユブ朝の第5代スルターン・アル＝カミールからおそらく中国を通して得たコバタン（インドネシアのスラウェシ、小スンダ列島等に生息）あるいはキバタン（オーストラリア、ニューギニアに生息）を贈られており、1241～44年の記録・絵の写本がバチカン図書館に所蔵されている [Dalton et al. 2018]。

ヨーロッパにおいて、オウムはインドの（神聖な）鳥と捉えられていた。よってコロンはアジアに到った証拠になり得ると考え、それを持ち帰ったことになる。話しはするものの、人間と同等の能力をもつわけではなく、他者性・劣等生を帯びる人間がオウムとして捉えられこともある。

オウムを食べることは、基本的には回避されていた。しかし、ローマの有力者の間では、珍味を食する慣習があり、例えば皇帝エラガバルスはオウムを振る舞い、食していたことが書き残されている。料理書 *De Re Coquinaria* (3c 後半) も、オウムの調理法に言及しており、これは1498年に印刷されている [Boehrer 2004b]。

オウム・インコ等の話す鳥は、反復のシンボルであり、自分の声の「鏡」でもある。よってその背後には、「自己」(self)の観念の付与が可能で、「自己」の生き写しにもなり得る。それを食する行為は、「自己」の殺害・摂取、すなわち食人と同意義となる。それが故に、航海者たちも「オウム喰い」をタブー視している傾向が認められる。

ローマ～中世・近世において、変化を経ながらも、エキゾチシズム・東方の豊かさ、神秘性、神性、聖母マリア、予知・予言能力、地上の楽園で創造される鳥、天国から来た鳥、奇跡的・超自然的存在、権力者へのお世辞・社会的風刺の題材、滑稽、野蛮性、劣位性、墮落など、オウムは多様な観念で捉えられている [Boehrer 2004a]。よって新世界表象の中のオウムは、必ずしも野蛮性・劣位性・熱帯のシンボルというわけではない。第3回航海で南米大陸北岸に達したコロンは、その奥に想定される大陸をインド・東方にイメージされていたエデンの園と捉えている。一方でオウムは、食人の観念とも深く関わっている。

オウムの名称には、papagayo (西語)、papegay, papegau (仏語)、papagalo (伊語)、Papegay (独語)、poppingay (英語) があり、仏語では12世紀にはすでにその使用が確認されている。16世紀以後には loro, guacamayo (西語)、perroquet (仏語)、parrot (英語) といったように多様化してくる。これらに加えて、古い表記の一つとして、ラテン語の psittacus (主格) がある。その単数与格と奪格は、psittaco となる。もちろんこの語は、スペイン語にもなっており、例えば Maria Moliner の辞書では、Psitac- を「ギリシャ語の psitakós (papagayo [オウム]) に由来をもつ形態」と説明し、Psitacismo: 丸暗記の教授法、psitacosis: オウム病、psitaciforme: オウムの足の形態、そして Psittacus を伴うオウム・インコ・ヨウムの固有名詞等が示されている。英語の psittacophagy は「オウム喰い」を意味する。

“psi”はギリシャ語の23番目のアルファベット Ψ である。ギリシャ哲学の観念で、息・心・魂・命・を意味する「プシケー」(Ψυχή、ラテン語: Psyche、西語: Psique) に代表されるように、ギリシャ語では“psi”は発音される。よって

psitacus/psittaco は、「プシタクス/プシタコ」と読まれてしかるべきで、それはアンデスの脂肪取り魔・「ピシュタコ」とほぼ同じ音になる。

「ピシュタコ」は、1560年の Santo Thomás のケチュア語・スペイン語辞書にすでに pistac という表記で収録されており、「Nacac. o pistac: 斬首者」、「Nacani, gui. O pistani, gui: 首を斬る」とある。Juan Martínez (1586) の辞書には、「Pistani: nacani を見よ」とあり、nacani には、「家畜を解体する、首を斬る、四裂きにする」とある。González Holguín の辞書には収録されていない。

「ピシュタコ」は、これまでの民族誌的記述を通して、都市性・他者性(白人等)が指摘されてきた。しかし語源を考えるとそれは表層的なもので、歴史的にはその内奥にオウム・自己性・自己による犠牲といった観念が内在していた可能性が高い。スペインのグラナダでは、同様の脂肪取り魔 Sacamanteca の存在が知られており、背後にロマ人(「ヒターノ」)が意識されることもある。またヨーロッパの処刑文化では、人間の脂や血液が病氣治療に用いられていた。誰かがスペイン・ヨーロッパの土着的な観念をアンデス先住民に伝え、その意味の同質性が媒介者と先住民の間で相互に共感・共有された可能性がある。

#### 【主要参考文献】

Boehrer, Bruce Thomas, 2004a, *Parrot Culture: Our 2,500-Year-Long Fascination with the World's Most Talkative Bird*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.

DOI: <https://doi.org/10.9783/9780812201352>

Boehrer, Bruce Thomas, 2004b, The Parrot Eaters: Psittacophagy in the Renaissance and Beyond. *Gastronomica*, Vol.4, No.3, pp.46-59.

DOI: <https://doi.org/10.1525/gfc.2004.4.3.46>

Dalton, Heather, Jukka Salo, Pekka Niemelä and Simo Örmä, 2018, Frederick II of Hohenstaufen's Australasian Cockatoo: Symbol of Détente between East and West and Evidence of the Ayyubids' Global Reach. *Parergon*, Vol.35, No.1, pp.35-60.

DOI: <https://muse.jhu.edu/article/698090>

## 人類学者と探偵：ある殺人事件をめぐる考察

武井秀夫（千葉大学）

キー・ワード： 北西アマゾン、殺人事件、調査と捜査、殺意とコスモロジー、外来資源

### Anthropologist who worked as a detective: Rethinking a murder case

HIDEO TAKEI (Chiba University)

Keywords: Northwest Amazon, murder, fieldwork and crime, intent to kill and cosmology, foreign resources

#### 1. はじめに

事件が起こったのは1987年12月24日午後、コロンビア・ブラジル国境を東西に流れるティキエ川のブラジル側、カチベラ L でのことである。L はコロンビア側のトゥユカ集落 A と、その50Kmほど下流のブラジル側集落 X との間の中点より上流に位置しており、L の上流と下流にそれぞれトゥユカ集落 B と C がある。事件は集落を二分する銃撃戦が勃発しかねない衝撃をもたらした。この事件の殺意の形成に関わるコスモロジカルな側面については以前に論じているが [武井 1995]、今回は事件の全体像からさらなる考察を加えてみたい。

#### 2. 集落 A の四つのグループ

A は東西二つの住区に分かれ、東には教会と寄宿制の初等学校、神父、シスター、教員の宿舎があり、ティキエ川流域唯一の警察官 J とその近親者の4家族が住む。西には前の首長 S とその弟、S の息子らの3家族、現首長の M とその兄弟らの4家族、そして唯一の他言語集団バラに属する P の家族が住み、ティキエ川流域を管轄するヘルスポストが置かれている。ヘルスポストは、この年11月に保健指導員として任用された M の次男 G が管理するようになった。また、P は教会の売店の経営を任されていた。

北西アマゾンはランク社会で、トゥユカもランク的に上位グループと下位グループに分かれ、前者がイナンプ川流域、後者がティキエ川流域をテリトリーとしていた。そこへ、イナンプ川流域でのランク争いに敗れた S と M のグループがティキエ川に移り住み始めた。最初はテリトリーから追い出されそうになったが、布教に来た

神父の執り成しで現住地に居住が認められた。その後、J から下位の上位グループ者が加わった。布教が神父 F に引き継がれるや、自分たちがティキエ川流域の最高ランクグループであると主張し、流域の中心集落の地位を得た。それにより、教会と売店、学校、ヘルスポスト、警察官駐在所等、外来資源の源泉を集落 A が独占することとなり、本来のテリトリー領有者である下位グループの集落に対する地位も逆転した。外来資源とその管轄者へのアクセスの重要性は4つのグループのリーダーたちだけでなく、集落の子供たちの間でさえも自明なことのように認識されていた [武井 1992]。

#### 3-1. 事件の概要

発端は23日昼頃 J が P と G を誘って、下流ブラジル領内の X へクリスマス用品（蒸留酒、花火、クラッカー、装飾品等）の買い出しに行ったことである。翌日、午後4時頃 J と P のみが集落に帰り着き、G が泥酔してカチベラ L に転落し、奔流に呑まれたままになったと主張した。急を聞いて駆け付けた M らが J、P や J の近親者たちと激しい口論になったが、神父 F と筆者が間に入り、散弾銃の銃撃戦は回避された。

#### 3-2. 人類学者、探偵になる

筆者はティキエ川流域を調査地とする過程で、パウペス地区保健局から地域の結核の現状調査と診療所職員（准看護師相当の看護職と保健指導員）の監督指導の依頼と、筆者自身の調査への全面的支援の提供という提案を承諾していた。それゆえ、保健指導員 G の行方不明という事態は、M の意向とは無関係に、彼らに何が起こっ

たのかを明らかにする必要を突き付けていた。しかし、彼らの激しいやり取りからはただならぬリスクも感じられた。リスクを回避してどう調べるか。筆者は探偵を始めることになった。

事件翌日、MらとXに往復し、途中の全トゥユカ集落に立ち寄り、目撃者の証言を集めた。

カチベラLを迂回する道で、争ったものと推定される痕跡をいくつか発見したが、決定的なものは見つからなかった。(後日、事件の決着後に、他集落の通行者がさらに奥の森の中に、はっきりした争いの後を発見したと聞いた。)

X集落でも、警察や商店主などに話を聞いた。彼ら3人の盛大な飲みっぷりのおかげで、Xでの行状は良く分かった。問題は帰路で、目撃証言も少なく、彼らが皆酔っぱらっていたという以上の情報は得られなかった。

Gの遺体は12月29日にカチベラLの下流で発見され、発見者の属する下流のC集落の墓地に埋葬された。その日、県都ミトゥで連絡を受けた筆者は、翌早朝、検視医、検視証人、救急隊チームとともに現地に向かい、検視を見守った。

Aから2時間以上も下って、検視は雨の中、集落の住人たち環視の下で行われた。泥濘の中何とか棺を掘り当て、蓋を開けて遺体を確認したものの、遺体の搬出は困難なので、遺体は棺中のままで検視が行われた。Gの遺体には頭部に切創、左胸にもかなり深い刺創があり、それが致命傷であるという確証は得られないものの、殺されたことは明らかであると検視医が判断し、筆者たちは検視調書にサインして検視を終えた。

### 3-3. 事件の結末

カチベラLやX集落で決定的な証拠は何も出てこなかったことを知った後、Jは県都ミトゥに飛び、判事や警察に自分の言い分を伝え回った。

しかし、遺体発見の報が届くと、Jのグループ4家族は早々に集落を出て行った。Pは叔母の夫であるMの弟に庇護されて、集落に留まった。

結局、事件は証拠不十分で、Jは無罪放免となった。警察官の職は辞さねばならなかったものの、罪には問われなかった。雨中の検視が不十分と判断されたことが決定的であった。

### 4. 考察：事件はなぜ起こったのか

事件の前にJとPに起こっていたことは引き金として重要だと思われる。Jの父は集落Aで最も経験豊富なシャーマンであったが、イニシエーション儀礼を任せないという形で首長のMに能力を否定され、失意のうちに数年前に結核で死ぬが、このとき復活とMへの復讐を誓ったという。87年8月には妻がイトコと駆け落ちし、11月には母が焼き畑からの帰路に「魔物」に襲われて死ぬ。Jは屈指の略の使い手であり、それによって警察官にも任命されているが、同時に、妻や母の一件をMによる邪術の結果と考えていた。特に後者は、父の復活を悪用されたと考えていた。Jは復讐のためにリボルバーの取得を試みたが失敗に終わっている。他方、Pは父が邪術の嫌疑で同胞たちに殺され、Aに逃れてきた。教会から任された売店経営が軌道に乗ったところで、今度は、その経営権を引き渡すようGから圧力を掛けられていた。Gは伝統的権威を笠に様々な外来資源にアクセスしてきた首長の父Mを見てきており、今度は自分で実践したのである。

事件を生じさせた主要因には、集落内の権力をめぐる争いと外来資源へのアクセスをめぐる争いがあげられる。人間的には前者はJとM、後者はGとPの間の争いであるが、見方を代えれば、ランク社会に根差す伝統的権力と国家や教会が持ち込んだ近代的な制度的権力のせめぎ合い、呪術的なコスモロジーと学校教育の浸透を背景とした合理主義的な世界観の競合と混淆がもたらした混沌の中のもがき合いとも見える。この争いの解決として彼らが手にした手段が刃物による殺人であった。外部から持ち込まれる欲望が次にもたらすのは何なのだろうか。

#### 【主要参考文献】

- 武井秀夫、1992、「保健所という名のカーゴ：北西アマゾンにおける制度的医療の受容の一側面」、『人類学と医療』（講座『人間と医療を考える』第4巻）、波平恵美子編、pp.44-69、弘文堂。
- 武井秀夫、1995、「内なるコスモスのズレと異性」、『Ronza』3号、pp.139-141、朝日新聞社。

## ボリビア・ラレカハの農地改革（2）

木村秀雄（自由学園最高学部）

キー・ワード： アンデス東斜面、アシエンダ、先住民共同体、自営農園

### La reforma agraria en Larecaja, Bolivia（2）

HIDEO KIMURA (Jiyugakuen College)

Keywords: *Eastern Slope of the Andes, Hacienda, Comunidad Campesina, Propiedad Particular*

#### 1. はじめに（前回の発表）

対象地域 ラレカハ溪谷上流部

先スペイン期チチカカ語岸政治集団の飛地  
植民期以来、先住民運動の盛んな地域  
生業 ジャガイモ栽培専業地域、トウモロコシ栽培専業地域、両作物栽培地域

経営 アシエンダ、先住民共同体、自営農園

#### 2. 対象地域

アシエンダの多様性の提示

先住民共同体（チラバヤ川西岸・中央尾根）  
自営農園（トウモロコシ栽培地帯に集中）  
アシエンダ（共同体を除いた全域に分布）  
標高の違いによってアシエンダの性格が違う  
溪谷内部において分布に違いがある  
アシエンダによって資料に性格の違いがある

#### 3. 最高標高部のアシエンダ

領域の標高が 3,500 メートル以上  
ジャガイモ栽培専業のアシエンダ

##### Cañaviri

総面積 1666.7000 ha. 可耕地 115.1074 ha. 6.91%  
個人専有地 45.2775 ha. コロノ 42.6573 ha.  
94.21% アセンダド 2.6202 ha. 5.79% アイノ  
カ 69.8299 ha.

##### Millipaya

総面積 496.4230 ha. 可耕地 49.0892 ha. 9.89%  
個人専有地 43.4914 ha. コロノ 39.8905 ha.  
91.71% アセンダド 3.6009 ha. 8.28% アイノ  
カ 5.5978 ha.

##### Lacatía

総面積 545.4800 ha. 可耕地 69.5092 ha. 12.74%  
個人専有地 25.6798 ha. コロノ 13.6445 ha.  
53.13% アセンダド 12.0353 ha. 46.87% アイ  
ノカ 43.8294ha.

##### Saira Churuni

総面積 638.1745 ha. 可耕地 100.3744 ha.  
15.73% 個人専有地 21.1132 ha. コロノ  
16.2246 ha. 76.82% アセンダド 4.8946 ha.  
23.18% アイノカ 79.2552 ha.

#### 4. 高標高部のアシエンダ

領域が 3,000 メートル以上から斜面上部まで  
ジャガイモ（多い）・トウモロコシ双方を栽培

##### Cuochini

総面積 178.6972 ha. 可耕地 11.2387 ha. 6.29%  
個人専有地 3.3374 ha. コロノ 2.5562 ha.  
76.59% アセンダド 0.7812 ha. 23.41% アイノ  
カ 7.9013 ha.

##### Chajhuaya

総面積 502.4748 ha. 可耕地 67.9448 ha. 13.52%  
個人専有地 18.2597 ha. コロノ 16.7039 ha.  
91.48% アセンダド 2.5129 ha. 8.52% アイノ  
カ 49.6854 ha.

##### Quirambaya

総面積 362.5250 ha. 可耕地 78.7075 ha. 21.71%  
個人専有地 42.3680 ha. コロノ 39.8551 ha.  
94.07% アセンダド 2.5129 ha. 5.93% アイノ  
カ 7.2961 ha.

##### Chillcani

総面積 490.1380 ha. 可耕地 120.6062 ha.  
24.61% 個人専有地 17.6562 ha. コロノ 16.7004  
ha. 94.59%アセンダド 0.9558 ha. 5.41% アイ  
ノカ 102.9500 ha.

#### 5. 中標高部のアシエンダ

領域 3,000 メートル以下から 3,500 メートル  
ジャガイモ・トウモロコシ（多い）双方を栽培

##### Capinota

総面積 350.7000 ha. 可耕地 111.8377 ha. 31.89%

個人専有地 40.4077 ha. コロノ 28.9220 ha.  
71.57% アセンダド 11.4875 ha. 28.43% アイ  
ノカ 71.4300 ha.

#### Colani

総面積 91.7983 ha., 可耕地 73.7698 ha. 80.26%  
個人専有地 50.1230 ha. コロノ 28.0740 ha.  
56.01% アセンダド 22.0490 ha. 43.99% アイ  
ノカ 23.6468 ha.

#### Pocobaya

総面積 586.4760 ha. 可耕地 97.7966 ha. 16.68%  
個人専有地 60.3742 ha. コロノ 47.1089 ha.  
78.03% アセンダド 13.2653 ha. 21.97% アイ  
ノカ 37.4220 ha.

#### Coca Millipaya

総面積 490.9872 ha. 可耕地 198.8237 ha.  
40.49% 個人専有地 16.0105 ha. コロノ 14.3869  
ha. 89.56% アセンダド 1.6236 ha. 10.14% アイ  
ノカ 182.8239 ha.

### 6. 低標高部のアシエンダ

領域の中心は 3,000 メートル以下  
ほとんどトウモロコシ栽培専業

#### Calabaya Grande

総面積 66.6400 ha. 可耕地 44.8960 ha. 67.37%  
個人専有地 44.8960 ha. コロノ 35.9040 ha.  
79.97% アセンダド 8.9920 ha. 20.03% アイ  
ノカ 0 ha.

#### Poquerani Chico

総面積 36.8740 ha. 可耕地 18.8067 ha. 51.00%  
個人専有地 18.8067 ha. コロノ 8.7967 ha.  
46.77% アセンダド 10.0100 ha. 53.23% アイ  
ノカ 0 ha.

#### Tahana

総面積 274.2925 ha. 可耕地 125.9331 ha.  
45.91% 個人専有地 68.7017 ha. コロノ 43.4993  
ha. 63.32% アセンダド 25.2022 ha. 36.68%  
アイノカ 57.2314 ha.

#### Achojpata

総面積 57.7640 ha. 可耕地 17.5736 ha. 30.42%  
個人専有地 17.6736 ha. コロノ 7.6416 ha.  
43.48% アセンダド 9.9320 ha. 56.52% アイ  
ノカ 0 ha.

### 7. コロノ割当地

#### Hacienda Cañaviri

コロノ割当地 (総数 48 人) 区画数 419 (46  
人) 区画総面積 41.277 (45 人) 0.1 以下区画  
397 (80.86%)

アセンダド専有地 区画数 12 総面積 72.4501  
平均 6.027.

#### Hacienda Quirambaya

コロノ割当地 (総数 23 人) 区画数 175 (23 人)  
区画総面積 28.8537 (23 人) 0.1 以下区画 92  
(52.57%)

アセンダド専有地 区画数 13 総面積 14.5183  
平均 1.1158

#### Hacienda Capinota

コロノ割当地 (総数 20 人) 区画数 90 区画総  
面積 28.9202 0.1 以下区画 27 (30.00%)

アセンダド専有地 区画数 24 総面積 11.4875  
平均 0.5744

#### Hacienda Poquerani Chico

コロノ割当地 (総数 4 人) 区画数 11 区画総  
面積 8.7967 0,1 以下区画 1 (9.09%)

アセンダド専有地 区画数 6 総面積 10.0100  
平均 1.6683

### 8. まとめ

#### 標高の違いによるアシエンダの性格の違い

- ・高標高部を持つアシエンダ=領域面積が大きい=コロノ割当地の比率が大きい
- ・高標高部=ジャガイモ耕作地=区画面積が小さい
- ・トウモロコシ耕作地=区画面積がこちらのほうが大きい

#### 溪谷内部の分布の違い

- ・サン・クリストバル右岸=アシエンダのみ=大きな標高差を持つアシエンダの存在  
中央尾根両側=共同体 1 つ=残りは標高差の少ないアシエンダのみが存在
- ・チラバヤ左岸=大きな標高差を持つ共同体とアシエンダ (最下流の 2 つ)

#### 資料の性格

- ・アシエンダごとに書類作成者の土地算定基準に違いがある=このままでは統計処理不能
- ・溪谷部農地の利用法についての知識から推定した書類の見直しの必要性

アンデス・アマゾン学会ホームページ  
URL : <https://sanams.web.fc2.com>

アンデス・アマゾン学会事務局  
〒905-8585 沖縄県名護市為又 1220-1  
名桜大学 国際学群 長尾研究室気付  
事務局連絡先 : [anam.estudios@gmail.com](mailto:anam.estudios@gmail.com)

アンデス・アマゾン学会研究発表要旨集 12号  
*Proceedings of the Annual Conference of SAAS*  
Volume 12

発行日 : 2023年11月20日  
編集・発行 : アンデス・アマゾン学会  
発行者 : 会長 大平秀一  
編集代表者 : 岡本年正